

エリクソンにおける女性性とジェンダー（2）

—アイデンティティ・親密性・ケア—

須川 公央

はじめに

前稿で述べたように、1960年代後半から70年代初頭にかけて繰り広げられたエリクソンの女性論に対する一連の批判は、大きく以下の二点において、エリクソン理論を誤読し、その本旨を取り誤るものであった。

第一は、フロイトとの理論的立場の相違に関する誤認。フロイトは、性差の心理・社会的分化の起源・原因を、唯一、男性器を基準とするエディプス・コンプレックスに求めた。結果、女性は男性基準の周縁に位置づけられることで、性差は非対称的に構造化されることになる。以上のようなフロイトの「男根中心主義 phallogocentrism」に対して、エリクソンは女性の解剖学的属性を本質化することで、性差の非対称性を解消しようと試みる。女性身体の特異性からケアなる理念を抽出し、それを既存の男性原理に対するアンチテーゼとして打ち立てるのは、なによりも男性中心の社会や制度の是正を企図したからであって、多くの批判者たちが論難したように、その逆ではない。

第二の誤読は、エリクソンの理論を「生物学的決定論 biological determinism」と見なすものである。この批判に対しては、彼の理論が生物学的本質主義ではあっても、断じて決定論ではないことを、繰り返し強調しておく必要があるだろう。前稿第二章で子細に論じたように、エリクソンは、性アイデンティティの形成における社会的条件の影響可能性を否定しない。さ

らに言えば、生物学的性差を意味する「セックス」と文化的・社会的性差を意味する「ジェンダー」の連続性を認める一方、多少なりとも両者の非連続性も認めるというのであるから、ジェンダーはセックスによって「決定」されるわけではない。

ここで、エリクソンの理論的立場を明確にしておくならば、それは「生物学的基盤論 biological foundationalism」（L・ニコルソン）に該当すると言えるだろう。ニコルソンは、生物学的本質主義を「生物学的決定論」と「生物学的基盤論」とに大別し、後者を以下のように説明する。

生物学的基盤論は、ジェンダーを「生物学の与件にたいする社会的反応の結果」と見なす考えであり、「程度の差はあれ、あらゆる形の生物学的基盤論にはなんらかの社会構築論の要素が含まれている」[Nicholson 1994:81f. =1995:108f.]。

ジェンダーを、生物学的与件という定数に対する社会的反応=インプット（独立変数）の結果=アウトプット（従属変数）と見なすこの理論は、以下の二つの論理的帰結を導くことを可能にする。一つは、ニコルソンも言うように、時代や社会によってジェンダーの有りようが異なるのは、その時々々のセックスに対する社会的反応——生物学的性差に対する意味付与のあり方——の違いによって説明できること。これは逆を言えば、通時代的、通文化的に共通するジェンダーの有りようを説明する際にも有効

なロジックとなる [ibid. 81=108]。二つ目は、ジェンダー不平等は、男性中心主義という社会の悪しき反応 (イデオロギー) に因るのであり、それを排除する——あるいは性差に関してより価値中立的なものへと改編することができれば、不平等は解消し、女性は自らの生物学的特性を遺憾なく発揮できるというものである。

エリクソンが企図したのは、まさにこれにはかならない。女性身体の特異性を本質化し、それを男性原理に對置して両者を止揚するという彼の構想は、詰まるところ、ジェンダーのセックス化を意図するものであった。そこには、セックスをジェンダーの土台と見なしたうえで、ジェンダーという構築物を取り去れば、セックスは何ら社会的文脈に属さない純粋な形として現れるという前提が潜んでいる。しかし、そもそも社会的意味付与の影響を免れた純然たるセックスなど抽出できるのだろうか。前稿で述べたことを繰り返せば、エリクソンは「文化的・社会的条件の影響を免れた理念としての女性原理を提唱するにあたり、それを文化的・社会的条件の影響を少なからず受けているはずであろう現実の女性の社会的属性から説明するという誤謬」[須川 2008:135] を犯している。これは、とりもなおさずセックスとジェンダーの混同であり、エリクソンの理論枠組みにしたがえば、ジェンダーからセックスを取り出すことは原理的に不可能であるということ、自らの理論を通して立証してみせたことにほかならない。

このエリクソン女性論の最大の難点は、生物学的基盤論に不可避的に付随する理論的陥穽でもある。そこで以下では、広く性差本質主義にまつわる諸問題を考察するべく、まずはキャロル・ギリガンによるエリクソン批判の検討から始めていくことにしたい¹⁾。

I. 女性のアイデンティティ発達の諸相— ギリガンによるエリクソン批判の検討

1. ギリガンによるエリクソン批判の要諦

「ケアの倫理 ethic of care」を提唱したことで知られるC・ギリガンは、主著『もうひとつの声 a different voice』(1982)において、従来の発達研究に通底する男性中心主義的偏向を明るみに出すことで、「人間一般の発達を記述していると称して」きた理論が、その実、女性現実とは乖離した理論であることを、実証研究を通じて明らかにしている [Gilligan 1982: 1=1986:xii]。

ギリガンによれば、これまでの発達理論は、女性の発達の特徴を捉えきれていないばかりか、ともすれば、それを標準化されたモデルからの逸脱と見なしてきた。しかし、そうした理論の多くは、もともと男性視点から作られたものである以上、女性の発達が「標準」を僭称する男性モデルから逸脱するのは、ある意味、当然なことであると言わざるを得ない。したがって、女性の発達の諸相を明らかにするためには、「もうひとつの声」である女性の声に耳を傾けることで、女性現実を踏まえた発達論を別に構築する必要があると主張するのである。

ここで「従来の発達研究」として批判の俎上に載せられているのは、主としてコールバーグの道徳性発達論であるが、ギリガンによれば、エリクソンのライフサイクル論もその例外ではない。その批判は、エリクソンが女性の発達過程を自説の中に組み込めていないという点に尽きる。

では、具体的にギリガンはエリクソンの何を批判したのか。少々長くなるが、以下に引用してみることにしよう。

エリクソンは、女性の発達過程は男性の場合とは若干異なると述べている。女性は、自分の「内的空間 inner space」を満たし、空しさや孤独から救ってくれる男性——その姓によつ

て呼称され、その地位によって自分の地位が規定されるような男性——を惹きつける準備をしている間は、アイデンティティ identityの形成を中断してしまうのである。男性にとってアイデンティティは、分離と愛着から成り立っている最適のサイクルのなかで、親密性 intimacyや生殖性 generativity を二の次にしているのに対して、女性にとってのアイデンティティはそうではなく、これらの課題と融合しあっているように見える。……しかし、エリクソンはこのように男女差があることを観察したにもかかわらず、彼の描くライフサイクルの諸段階の図式は変更されないままである。男性経験がライフサイクルの概念を定義づけているので、アイデンティティは親密性に先立つものとして描かれているのだ。

[Gilligan 1982:12f. =1986:14f.]

ギリガンの主張はこうである。エリクソンのライフサイクル論——いわゆるエビジェネティック・チャート——は、男性視点にもとづいて構築されているため、女性のアイデンティティ形成の特性を十分に描ききれていない。ギリガンによれば、男性は他者からの分離や個体化にもとづいてアイデンティティを確立するのに対し、女性のそれは他者との親密性や愛着といった過程に深く根ざしている。ところが、ライフサイクル論は「発達それ自体が分離と同一視されている」[ibid.] ため、この図式のもとでは、親密性や愛着を基調とする女性のアイデンティティ形成は発達不全と見なされてしまう。女性においては、五段階目のアイデンティティ課題と六段階目の親密性課題は融合しているか、もしくは後者が前者に先行するというのがギリガンの見解であり、これら観察結果を踏まえたうえで、エリクソンの発達論は然るべき図式に修正されなければならないと言うのである。

もっとも、こうした批判はギリガンが嚆矢というわけではなく、発達心理学の領域では、すでに早くから同様の指摘がなされていた。

たとえば、J・E・ギャラティンは、アイデンティティから親密性へと移行するエリクソンの記述が、男性には適合しても女性には適合しないことを示唆している [Gallatin 1975]。同様に、E・ドーヴァンとJ・アデルソンは、青年男女を対象とした全国調査の結果から、エリクソンが示したアイデンティティから親密性へという発達経路は、女性においては逆の順序で進行すると指摘する [Douvan & Adelson 1966]。

ギリガンの見解を裏付ける研究は数知れないが、他方で、エリクソン理論を擁護する研究も存在することは、併せて指摘しておかねばならない。その代表格である発達心理学者のS・L・アーチャーは、J・E・マーシアのアイデンティティ・ステータス面接にもとづく調査結果から、男女のアイデンティティ形成の過程に有意な差は確認されなかったと報告している [Archer 1982、1989]。

本論では、アイデンティティと親密性の順序をめぐる、これら先行研究結果の当否については判断を保留する。というのも、半構造化面接を主とするこうした調査は、必ずしも分析手法や条件が統一されているとは言い難く、何よりもアイデンティティ形成の性差による違いは、時代や文化、性役割期待といった社会的条件によって大きく左右されると考えるからである。

代わって本論が検討するのは、ギリガンを始めとする批判者たちが暗黙のうちに前提としているエリクソン解釈の構図である。こうした批判は、そもそも如何なるエリクソン解釈にもとづいているのか。以下では、エリクソンのテキストを内在的に検討することで、これら批判の妥当性について検証してみることにしたい。

2. ギリガンによるエリクソン解釈の構図

ギリガンら修正論者に共通するエリクソン解釈の第一のスキーマは、ライフサイクルを他律から自律、自他未分から自他分離へと進展する分離個体化モデルと見なすというものである。エリクソンの発達論に女性視点の欠如を見いだ

す論者の多くは、ほぼこの構図に準拠するかたちで批判を展開してきたと言って良い。たとえば、ギリガンによる次の一文。

彼（エリクソン）は、…… 発達の過程をそこで経験されることはすべて自律性や個体化へと向かっていく各段階に位置づけられるものとして図式化している。したがって、分離それ自体が成長のモデルであり、基準となっている。エリクソンは、女性のアイデンティティは分離のみならず親密性とも関連しているということを見出しているが、この発見は彼の図式にはあらわれていないのである。

[Gilligan 1982:98=1986:173]

ライフサイクルを自律性の獲得とそれに随伴する個体化のプロセスと見なす考え方は、エリクソン解釈としては特に目新しいものではない。問題は、こうした議論が「分離 separation」をライフサイクル全体に通底する基本原理と見なすことで、分離とは原理的に対立するであろう愛着や親密性といった観点が、過小に評価されていると指摘する点にある。

この点に関して、ギリガンは若干の留保を加えつつも、次のように述べている。「信頼 trust 対 不信 mistrust という第一段階においては、エリクソンが親密性 intimacy とジェネラティヴィティ generativity という言葉で表現した相互性 mutuality の型が示されて」いるが、「それ以外は分離に関わることであり、発達それ自体が分離と同一視される結果となっているのだ」[ibid. 12=15]。

ライフサイクルの第一段階（信頼）と第六段階（親密性）、第七段階（ジェネラティヴィティ）以外は分離に関わるということが、どうして「発達それ自体が分離と同一視される結果」となるのか。一見すると、論理的に飛躍していると思われるこの主張の妥当性については、今は論及しない。むしろここで確認しておきたいのは、アイデンティティと親密性の各段階に焦点

を絞ったうえで、前者が分離に、後者が愛着や相互性といった関係性の原理に基礎づけられている点である。

先に見たように、ギリガンは女性のアイデンティティが分離のみならず親密性とも関連すると指摘することで、ライフサイクル論の妥当性に疑義を呈する。具体的には、女性の発達過程は第五段階（アイデンティティ）と第六段階（親密性）において融合しているか、あるいは順序が逆転しているというのが彼女の主張なのだが、それは女性が分離を基調とするアイデンティティ課題よりも、愛着や関係性を基調とする親密性課題に親和的であるという理由からにはほかならない。これは逆を言えば、青年期の男性にとっては、親密性課題よりもアイデンティティ課題の方がより親和的だということでもある²⁾。

では、こうしたアイデンティティ形成上の男女差は、いかなる発達論的条件に起因するのだろうか。ギリガンは、その主たる原因を人生早期における母子関係の有りに求め、次のように述べる。「少年や男性にとっては、母親からの分離が男らしさの発達に不可欠」であるが、「女らしさあるいは女性としてのアイデンティティの問題は、母親からの分離や個体化の進行によるのではない。女らしさは母親の愛着によって、男らしさは母親からの分離によって定義される」のである [ibid. 8=8]。

このように、ギリガンの議論には明瞭なる基礎づけの論理——本論はこれをエリクソン解釈の第二のスキーマとする——が見てとれる。一つは、アイデンティティ課題を分離に、親密性課題を愛着に基礎づけるというものであり、もう一つは、両原理をジェンダー・カテゴリーに組み込んだうえで、前者を男性的課題、後者を女性的課題として捉えている点である。

そして何より重要なのは、この二分法的な枠組みそれ自体が「分離」の原理的優位の下に把握されている点であろう。男性にとって、アイデンティティから親密性という通常の経路での

課題達成はさほど困難ではないが、女性にとってはそうでない。その理由は、エリクソンの図式が「分離それ自体を成長のモデルであり、基準としている」——すなわち男性経験を発達したの基準・指標としているからである。ライフサイクル論はジェンダー非対称な構造を宿しているがゆえに、女性のアイデンティティ形成は男性基準からの逸脱という形でしか表現されず、結果、親密性や愛着といった女性的特性は過小評価されてしまうというわけである。

以上、ギリガンによるエリクソン解釈の構図を二点に分けて確認した。もとよりこうした批判は、その解釈枠組みが正当であるという前提に立ってのものである。はたして、エリクソンの議論は上記の構図に収まり得るものなのか。その解釈枠組みの妥当性こそが、吟味されてしかなるべき課題なのである。

3. アイデンティティと親密性をめぐって

ライフサイクルを各段階の特性に応じて、「分離」（自律性、個体化）と「愛着」（相互性、関係性）から成る二系列に振り分け、図式全体を二分法的に把握するという発想は、比較的オーソドックスなライフサイクル論理解であると言って良い。

たとえば、C・E・フランツとK・M・ホワイトは、全八段階の発達図式を「個体化経路 individuation pathway」と「愛着経路 attachment pathway」という二つの経路によって理解できると考え、独自に「複線モデル two-path model」なる理論を提唱する。経路の名称からも推察されるように、その理論もギリガン同様、ライフサイクル論が相異なる二つの原理を伏在させているという認識を基調とするものである [Franz & White 1985]。とりわけ、アイデンティティと親密性の各段階に関して言えば、前者が分離（個体化）に、後者が愛着（関係性）に基礎づけられていることから分かるように、概して、両課題は対極的かつ二律背反的な関係にあるものとして理解されてきた³⁾。

しかし一方で、このような二項対立的な図式把握は、エリクソン理論の過度な単純化であるとの批判も存在する。その一人E・A・ホーストは、以上の通説的解釈に反駁を試みるべく、次のように述べている。

エリクソンは、断じてアイデンティティと親密性を分離 separateness と関係性 connection という対極概念で表現しようとしたわけではなかった。……エリクソンの親密性に関する議論に立ち戻れば、分離と関係性という緊張関係は親密性課題の本質であるということが分かる。対極性は親密性課題それ自体のなかに存在しているのであり、アイデンティティと親密性の間にあるのではないのである。

[Horst 1995:275]

上記引用中の「対極性は親密性課題それ自体のなかに存在している」とは、いわゆる「エピジェネティック・チャート epigenetic chart」における心理社会的危機（～対 (vs.) ～）のことを指している。ホーストによれば、批判者たちは「各ステージの片方の項目（アイデンティティや親密性）だけを引用する傾向」[ibid. 274] があり、それが結果として、課題間ではなく課題内に存在する対立関係を見失わせてしまっていると指摘する。対極性は親密性とアイデンティティの間にあるのではなく、前成人期の発達課題である「親密性 (intimacy) vs. 孤立 (isolation)」にこそ存在すると言うのである。

心理社会的危機に対蹠関係を見いだすべきであるというこの指摘は、ある意味当然と言えば当然なのだが、むしろ注目すべきは、ホーストがアイデンティティと親密性の原理的反否性を否定している点であろう。それは言うなれば、先の二分法にもとづく概念把握それ自体の無効性を主張しているということでもある。

では、そもそもアイデンティティおよび親密性とは何か。これまで幾度となく検討されてき

たそれら定義については、ごく簡単に触れるにとどめ、ここでは主に両課題の關係に焦点を絞って見ていくことにしたい。

まずアイデンティティであるが、その最も簡潔な定義によれば、「アイデンティティという言葉は、自分自身の中で永続する斉一性（自己斉一性）という意味と、ある種の本質的な特性を他者と永続的に共有するという両方の意味を含むような、その両者の相互關係」[Erikson 1959:109=2011:112] と定義される。これは端的に言ってしまうと、自分が自分であるという感覚を他者との永続的な関わりの中かで再確認していくということであり、畢竟それは、自己の同一性感覚が自己自身のみならず他者による自己承認を以て獲得されることを意味している。R・ジョセルソンは、こうしたアイデンティティの有り様を「關係内自己 self-in-relation」という言葉で表現するが [Josselson 1987]、その意味では、アイデンティティは分離という言葉から想起されるような個體論的な概念ではなく、すぐれて關係論的な概念であると言うことができよう。

一方、親密性については、「複数のアイデンティティの融合であると同時に、それらアイデンティティの独自性を際だたせるもの」[Erikson 1968:135=1973:177] と定義されるように、それは自己と他者が分離しているように融合している、あるいは融合しているにもかかわらず個が際だつといったような、そうしたキアスム的な対人關係様式を特徴とする段階と理解して良い。

エリクソンは、親密性の具体的エピソードとして、前成人期に特有な異性間（同性間）の性的關係や友人關係を例に挙げて説明するが、彼によれば、こうした他者との親密な關係が可能になるのは、「アイデンティティが申し分ないほどに確立されている場合に限られる」[ibid.] とする。というのも、アイデンティティが未成熟な場合、個人は他者との親密な關係（融合）によって自らの同一性が脅かされるのを恐れ、

關係そのものにコミットすることを躊躇するか、さもなければ、それは擬似的親密性という形となって、「互いを自己愛的に鏡に映しあうことにより、ぼやけたアイデンティティの輪郭を明確化しようという絶望的な試み」[Erikson 1959:134=2011:143] へと墮してしまいかねないからである。

エリクソンが親密性課題に先立ってアイデンティティ課題を設定するのは、およそ以上の理由による。しかしこのことは一方で、後に修正論者たちが論難することになる主要な争点の一つとなったということも明記しておく必要があるだろう。

アイデンティティと親密性の關係について、M・A・カセルギスとG・R・アダムスはアイデンティティ・ステータス面接や親密性ステータス面接等による実証調査から、「アイデンティティの形成は、青年期および前成人期における成人の親密性発達にとって、十分条件ではあっても必要条件ではないかもしれない」[Kacerguis & Adams 1980:124] と結論づけている。これはつまり、アイデンティティの成熟度が高ければ、相対的に親密性の成熟度も高いという事実だけが立証されたということであり、その逆命題——親密性発達はアイデンティティの成熟を必要条件とする——を主張するエリクソンの見解を部分的に否定するものである⁴⁾。もっともカセルギスらによれば、以上の結果は男女両性に認められるとしており、それは性差によってアイデンティティと親密性の順序は異なる（あるいは同時進行）と指摘したギリガン理論の傍証となり得ないことも併せて確認しておく必要がある。

いずれにせよ、エリクソンの定義からも明らかのように、ギリガンら修正論者による二項対立的な図式把握は、あまりに紋切り型な解釈であると言って良いだろう。先に引用したホーストによれば、「分離」（自律性、個體化）と「愛着」（相互性、關係性）の両原理は、アイデンティティ課題と親密性課題のいずれかに還元さ

れるものではなく、その双方を特徴づけるものである。したがって、これら二つの課題が原理的に相反する関係にない以上、「アイデンティティは親密性課題に先行しているのか、後に続くものなのか、あるいは一体化しているのか」といったことは、それ自体が貧弱な考え方」[Josselson 1987:22] であると言えるかもしれない。

ギリガンが提唱する「ケアの倫理 ethic of care」は、以上のエリクソン解釈を自説の下敷きとするものである。女性経験から帰納的に導き出されたケアの倫理は、その根底において、女性のアイデンティティが親密性や愛着といった特性に基礎づけられているという認識を議論の出発点に置いている。それは以下のC・Z・エンスの指摘にもあるように、ケアや親密性を女性カテゴリーに振り分け、固定化することで、はからずも伝統的なジェンダー秩序の再生産に寄与してしまう本質主義的な議論ということになりはしないだろうか。

「女性の基本的志向は、ケアすることに向かうことにある」[Jordan & Surrey (1986)] とか、「女性は自身のアイデンティティを親密性やケアの関係をとおして規定する」[Gilligan (1982)] といった一般化は、女性であることや男性であることの対極化された変数もしくはカリカチュアとして、個人が自律性や関係性の問題を考察することを促進した。……加えて、女性の強固な養育やケア能力を描き出そうとすればするほど、男性がこの領域において能力を発揮し同定することはほとんどありえなくなってしまう。かくしてジェンダーに関連した不平等が強化されてしまうのである。

[Enns 1991:214]

II. エリクソンのケア論 — 徳としての「ケア care」

1. ライフサイクル論における「ケア care」の位置

もとより、上述のギリガン理論に見られる本質主義的傾向⁵⁾は、エリクソンのケア論においても同様に認められるものである。たとえば、次の一文。

女性のケアに対する準備は、より明白に女性の身体に根ざしているものであり、それはいわば、ケアの形態学的見本であり、保護された住み家、栄養の源でもある。

[Erikson 1964:132=1971:130]

上記引用に端的に示されているように、その理論は、ケアを女性固有の特性として認める本質主義との印象を拭いきれない。それは前稿の検討からも明らかであろう。

とはいえ、ここで彼のケア論を一端、ジェンダー拘束から解放し、その概念の多層的な意味合いを探ることは、決して無駄な作業ではないように思われる。

前稿からの続きで言えば、エリクソンは、ケアを性差に還元できるとは考えなかった。「これまで女性的なものとして提示してきた基本的な枠組みの大半は、すべて男性のなかになんらかの形で同時に存在している」[Erikson 1968:282=1973:398]。女性にとってそれは、身体の解剖学的条件によって最適形態として与えられているに過ぎない。

それが証拠に、性差を問わず運用可能なものとして構想されたライフサイクル論は、その発達段階の七段階目にあたる成人期の「徳 virtue」に「ケア care」をおいているし、サイコヒストリー研究の金字塔ともいえるべき『ガンディーの真理』(1969)が、ガンディーの生育史研究から彼の特異なケアの資質を明らかにする試みであったことを思い起こせば、それは明らかで

ある。

そこで以下では、「ライフサイクル life cycle」, 「相互性 mutuality」, 「倫理 ethics」という三つの観点から、エリクソンのケア論の具体的内実とその多面的性格を浮き彫りにすることにしよう。

まず、彼のケア論を理解するうえで欠かせないのが、先にも取りあげたエビジュネティック・チャートと呼ばれる図表である。この発達図式は、<~対 (vs.) ~>という対立する二つの発達上の危機によって示される発達課題ばかりが注目されるが、ここではその危機を乗り越えることによって獲得される「徳 virtue」に焦点をあてることにする。

エリクソンによれば、成人期の心理社会的危機は、「ジェネラティヴィティ (generativity) vs. 自己没頭と停滞性 (stagnation and self-absorption)」という二つの対立項目によって表現される。この対立項の肯定的項目であるジェネラティヴィティは、狭義には「生殖性 procreativity」を意味する言葉であるが、その概念の射程は次世代の再生産だけにとどまらず、「生産性 productivity, 創造性 creativityを包含するものであり、……新しい存在や新しい制作物や新しい観念を生み出すこと」も意味している。一方、否定的項目である自己没頭・停滞性は、「世代継承的な活動において活性を失った人たちに特有な失調傾向であり、「疑似的親密性への強迫的欲求あるいは自己イメージへの一種の強迫的な耽溺といった形で、過去の段階への退行」を生じさせる心性を指す [Erikson 1997:67=2001:88f.]。そして、この相対立する葛藤の危機を乗り越えることで獲得されるのが、徳としての「ケア care」である。

もう少し詳しく見ていくことにしよう。「徳 virtue」あるいは「基本的な強さ basic strength」とも言い換えられるケアは、ジェネラティヴィティと自己没頭・停滞性という対立する二つの自我感覚が、一定の比率において、前者が後者を上回る「協和傾向 sympathetic trend」に達

した際に生起するとされる。エリクソンによれば、人生の中年期は世代継承にまつわる様々な葛藤の場面に遭遇する時期であると言う。具体的にそれは、「男女ともに、何を、そして誰を気づかう (care for) か、何を立派に果たそうと気をつけている (care to do) か、そして、今後いかなる計画のもとに、すでに着手し、創造したものを世話していく (take care of) か」を、自ら主体的に選択し決断していかなければならないという事態である [Erikson 1969:395=1974:245]。ケアにまつわるこの葛藤的な局面において、自己没頭・停滞性という感覚を残りしつつも、それを超克する程度に、自我がジェネラティヴィティの感覚を親和的に感じ取るならば、心理社会的危機は一定の解決を迎え、「基本的な強さ」としてのケアが強化されることになる、そうさしあたり理解して良い。

2. ケアと拒否性の相克

ところが、話はそれほど単純ではない。この成人期における危機の解決という課題は、当然のことながら、自己没頭・停滞性の感覚が優位となる可能性を排除するものではない。エリクソンは、心理社会的危機において否定的感覚が凌駕してしまう事態を「不協和傾向 antipathic trend」と呼び、成人期において出現する不協和特性を、ケアと対をなす「拒否性 rejectivity」という言葉で表現する。拒否性とは、「特定の人間や集団を自分の世代継承的関心のなかに含めることの嫌悪——つまり彼らのケアをしたくないこと——である」 [Erikson 1997:68=2001:90]。それは自身の子どもに対する虐待というネガティブな形として表出されることもあれば、「異国の人たちの様々な大集団を「向こう側」としてひとまとめに括ってしまう」 [ibid. 69=91] 排他的な観念や行為としても現れるものである。

このように、「ジェネラティヴィティ vs. 自己没頭・停滞性」という弁証法は、ケアと拒否性という二つの発達の特質を交互に生起させ

るのだけれども、ここで留意すべきは、両者は互いに排除しあう関係にあるのではなく、相補的に機能するという点である。「人間は「ある程度、明確な拒否性を有する」という程度まで選択的にならないと、(何者かに対して)世代継承的でありかつケアに満ちているという状態には」なりえない。というのも、ケアは本性上、「最も「近しい」ものを好む——あるいは最も「近しい」ものにし得るものを好む——という意味で、きわめて選択的なもの」[ibid. 68=90f.]だからである。

これはいみじくも品川哲彦の指摘する、N・ノディングスのケアすべき対象の限界性という議論と符合する [品川 2007]。通常、ケアの対象は、ケアするものにとってより身近な個別具体的な他者である。ケアは、それを必要とする者の個々のニーズを看取し、そのニーズに対して個別具体的に応答する状況依存的な実践であるという点で、その対象を他者一般にまで拡張することには困難が伴う。その限りで、ケアは対象選択的であるということ、つまり一定の拒否性なくしては成立しえないものである。

では、ここでエリクソンは、ケアできる範囲は限られているという現実上の制約をただ追認しているだけなのだろうか。否、そうではない。確かに、ケアすべき対象の設定は、ケアする者の自己選択的な判断に大きく依存している。そうした現実的制約を不可避なものとしたうえで、にもかかわらずケアを普遍化していくためには、ケアをしたくない、あるいはできないという拒否性の限度がどの程度まで許容されるかを、倫理や法によって規定する必要があると言うのである。「それゆえに倫理や法や洞察は、その集団における拒否性の許容範囲を定義しなければならないのであり、……より広範な共同体単位に対する、より普遍的なケアの原理を唱道し続けなければならないのである」[Erikson 1997: 68=2001: 91]。

このようにケアは、それが「徳 virtue」とされていたことから明らかなように、具体的

な他者に限定されない普遍的な広がりをもった倫理的命題である。しかもそれは、ケアの対象が人に限定されないという意味でも、普遍的な広がりを有している。「ケアは、これまで大切にしてきた (care for) 人や制作物や観念を世話すること (take care of) ことへの広がりゆく関心である」[ibid. 67=88f.]。

では、エリクソンはケアを徳へと昇華させるにあたって、何を根拠にそれを倫理的命題として定立するのか。言い換えれば、「なぜ我々はケアをしなければならないのか」という、ケア倫理の基礎づけの問題について見ていくことにする。

3. 「相互性 mutuality」としてのケア—— ケアの倫理に向けて

すでに西平直が指摘しているように、エリクソンの言う「徳 virtue」は、事実性と規範性という二重の性格をまとった概念である⁶⁾。まず徳の事実性ということに関して言えば、「エリクソンは、発達の事実の中から徳 (virtue) を取りだした」[西平 1993: 45] とあるように、それは当初から規範的命題として構想されていたわけではない。発達観察という臨床的洞察にもとづいて抽出された、「人間が生きるために最低限備わっていると認めざるをえない強さ」[ibid. 45] だということである。それは人に生得的に備わっている基本的強さではあるが、心理社会的危機の継起にもなつて自然発生的に生起するのではなく、「相互性 mutuality」にもとづく世代間相互作用を通して賦活される発達の特質である。エリクソンはこの相互性を、「他人を強化しているにもかかわらず、自身をも強化する」[Erikson 1964: 233=1971: 240] ことと定義し、その具体例として母子関係を挙げる。

母子関係において、赤ん坊は一見すると無力かつ脆弱な存在であるかのように見えるが、その「傷つきやすさや純粋に必要な従順さそれ自体が、力を持っているのである」[ibid.

114=108]。この「傷つきやすさ vulnerability」という力こそが、母親のケアなる徳を喚起し、実際にケアせしめるとともに、赤ん坊もまたそのケアを通して、自らの徳——「希望 hope」——を育むのである。それは、赤ん坊というヴァルネラブルな存在そのものが応答責任を迫ってくるという意味で、「存在と当為」、「事実と規範」が渾然一体となった場面と言えるが、もっとも、こうした状況は母子関係に限られるものではなく、〈ケアする／される〉関係一般にまで敷衍されるものである。

ここでケア関係一般に妥当する相互性の原理について、それが互恵的な関係性を前提とする限りにおいて、徳の「相互活性化 mutual activation」を促すということは、強調しておく必要があるだろう。エリクソンによれば、「成熟した人間は必要とされることを必要とする」[Erikson 1950:266f. =1977:343]。まさにその理由によって、人はケアをするのである。したがって、自らの必要を満たさない（されない）ケア、すなわち自身の徳を強化しないようなケアは、たとえそれが相手の徳を強化するものであっても、本来的なケアのあり方ではない。例を挙げれば、ケアする者が自らの限界を超えて過度な負担を感じてしまうような自己犠牲的なケアは、ケアではないということである。

このように、エリクソンのケア論は、他者へのケアのみならず、自己へのケアという視点をも含み込んだものである。しかもそれは、他者への配慮が同時に自己の配慮となるような事態、自己への配慮が同時に他者の配慮につながる関係性を志向するという意味で、〈ケアする者／される者〉の関係それ自体をケアすることが目指されていると言えよう。相互性の原理にもとづけば、他者へのケアなき自己のケアは存立しえず、同様に、自己へのケアなき他者のケアは存立しえないのである。

しかし一方で、こうした相互的なケアは、その理論の素朴さゆえに、ケアの現実とは乖離した理想論との印象を与えかねない。というのも、

他者志向と自己志向という相矛盾するケア志向を両立させることの困難性——他者のケアに没頭することが、往々にしてケアする者の消尽を招くというケースは典型である——に加え、そもそもケアは非対称な関係に発するものである以上、それは時に、支配／被支配という不均衡な力関係と呼び込みかねないものだからである。相互性を基調とするエリクソンのケア論は、ケア関係における対等性を強調するあまり、非対称なケア本来の有り様を見失わせがちであるが、もちろんエリクソン自身とて、そのことに無自覚であったわけではない。エリクソンは、この関係の非対称性を「不平等 unequal」という言葉で表現し、大人と子どもの関係を例として挙げる。大人と子どもの不平等な関係は、子どもをして「人間の生活における技術的熟達や文化を享受する能力の育成を促進する」が、一方でそれは「被搾取性を助長する生存の実態の一つである」[Erikson 1950:422=1980:206]。

非対称（不平等）な関係は、それなくしてはケアが成立しない——ここでエリクソンが念頭に置いているのは、世代継承的営為としての教育である——という意味で、ケアの必要条件と言えるが、それは往々にして、他者の同化や抑圧といった事態をもたらす。

では、ケアを搾取関係ではなく互酬関係として維持させるためには、どうすれば良いのか。ここで相互的なケアが、ケア関係それ自体をケアすることであったことを思い起こせば、当然それは、自らのケアの有りようを俯瞰する視点も含まれていると理解すべきだろう。エリクソンは、ケアに該当するヒンディー語の一つに *Dāma* (Restraint: 抑制) を挙げ、それを「慎み深いこと to be careful」と表記している [Erikson 1997:58=2001:74]。

その派生語によってエリクソンが意図するのは、ケアを維持するためには、状況に応じて、自分のケアの有りようを熟視し、抑制する必要があるということである。相手の必要を自らの必要に資する形で搾取し、利用するものとなっ

ていないか、あるいは逆に、他者のケアに専心没頭することにより自己への配慮が疎かになっていないかといった、関係それ自体への配慮なくしては、相互的なケア関係は維持されないのである⁷⁾。

最後に、エリクソンのケア倫理の基礎づけの問題について言及することにした。エリクソンによれば、徳としてのケアは、人の発達事実のなかから抽出された基本的強さであるとともに、個人の「積極的選択 active choice」にもとづいて選び取られるべき肯定的目標でもある。これははとすると、「事実」から「価値」を導き出す自然主義的誤謬を犯しているように見えなくもないが、事はそれほど単純ではない。発達という事実それ自体が、内的法則にもとづく目的論的志向性を宿しているがゆえに、価値はすでに事実のなかに組み込まれているのである。しかし一方で、基本的強さという価値は、他者との相互的な関係によってしか賦活されないものである以上、それは自他ともに相互の倫理的関与を要請するものとならざるをえない。ここで、ケアを倫理とすべき根拠は何かと問うならば、エリクソンは端的にそれを「世界の維持 maintenance of the world」[Erikson 1974: 124=1979:160] という存在論的根拠に求める。ケアなくしては「世界の維持」は叶わない。それは、自らが依って立つ存在論的基盤の存立にも関わる事柄であるがゆえに、個人は倫理的責務としてケアすることが要求されるのである。

ケアという徳は、個人の発達事実および社会という制度的事実のなかに既に価値として埋め込まれているが、それは個人間の、ひいては個人と社会の相互交渉によって不断に賦活し続けなければならないものである。「価値」なき「事実」は空虚であり、「事実」なき「価値」が単なる教条主義と墮してしまふように、それらは截然と切り離すことができないものである。エリクソンのケア倫理は、そうした「事実」と「価値」の往還運動のなかで現れてくる、アクチュアルな人間の倫理実相をこそ描き出そう

とするものに他ならないと言えるだろう。

おわりに

以上、ギリガンによるライフサイクル論批判の検討およびエリクソンのケア論について順次考察してきた。ここで、第一章の内容に関して若干の補足をすれば、前稿で取りあげた「内的空間と外的空間」論文の考察結果からも明らかのように、エリクソンとギリガンは理論の立脚点こそ違え、両者の志向するところはきわめて近似していると言えるだろう。エリクソンの伝記作家であるL・フリードマンによれば、ギリガンは「女性の発達において、相互性、尊敬、そしてケアが中心的な位置を占めている」という事実を、「エリクソンの「内的空間と外的空間」説から着想を得た」のだと言う[Friedman 1999:426=2003:459]。エリクソンがその女性論において、女性のアイデンティティ発達の特殊性を認識していたにも関わらず、ライフサイクル図式に修正を施さなかったのは、ホーストが指摘するように、「彼(エリクソン)の性差に関する議論は、おそらく追加部分としての産物だったのであり、彼の生涯においてそれほど関心の払うものではなかった」[Horst 1995: 272] という理由によるところが大きいのかもしれない。

もっとも、ギリガンの批判内容については、本論で検討してきたとおり、発達図式の過度な単純化による牽強付会な解釈が見られるという点で、理論的に難点の多いものであると言わざるを得ない。

最後に、前稿の考察のまとめも兼ねて、〈ケアとジェンダー〉をめぐるフェミニズムの思想的系譜のなかにエリクソンの議論を定位することで、本問題構制に内在する理論的困難を明らかにし、本論を閉じることにしたい。

周知のように、〈ケアとジェンダー〉という問題系は、フェミニズムにとって常に主要な基本問題の一つとしてあり続けてきた。たとえば、

第二波フェミニズムを理論的に先導したラディカル・フェミニズムは、今日、我々がケア労働と表現するところの母親業や家事労働、介護労働等を、家父長制イデオロギーの産物であると喝破したことは良く知られている。また、マルクス主義フェミニズムにおいては、女性のケア労働は、資本制生産様式を底辺において支える下部構造として機能することで、男性による性支配を再生産する元凶とされてきた。

こうした現状認識にあつて、第二波以降のフェミニズム諸派が採用したのは、男性支配からの女性解放という目的のもと、性差という「差異 difference」をどう方法論的戦略として位置づけるかという点にあつたと言えよう。初期のラディカル・フェミニストは——それを「戦略」として自覚的に扱ったかは疑わしいが——、生物学的性差を前提としたうえで、ジェンダーを最小化することに腐心してきた。家父長制というイデオロギーによって不当に押しつけられた「ケア＝女性」という社会的通念や制度を脱ジェンダー化するためには、女性が連帯してヘゲモニーを奪取する必要がある。それは時に、男性社会から分離した女性だけの共同体を目指す「分離主義 separatism」を生み（レズビアン・フェミニズム）、その生物学的本質主義は、女性身体の否定というネガティブな形として現れることにもなった（ファイアーストーンら）。一方で、1970年代後半になって登場する文化派フェミニズムのインパクトも忘れてはならない。彼女たちは、それまでのラディカル・フェミニズムの脱ジェンダー志向とは対照的に、性差を肯定的に再評価する——すなわち、女性固有の経験や文化を積極的に称揚することで、男性原理に偏りすぎた社会の不均衡なバランスを回復しようと試みたのであつた。

さて、以上のように概観したうえで、エリクソンの議論を上記の文脈に定位してみるならば、それは後者の文化派フェミニズムの主張を先取りするものであつたと理解して良いだろう。しかしながら、ラディカル・フェミニズム全盛の

時代にあつて、その理論が企図するところは十分に理解されることなく、はからずも性差を解剖学的宿命と見なすフロイト理論のヴァリエーションとして誤読され、批判されたのであつた。フリードマンがいみじくも指摘するように、「エリクソンは、ある意味では、フェミニストの視点の変化に巻き込まれた犠牲者」[Friedman 1999:426=2003:458] だつたと言えるのかもしれない。

もっとも、前稿で述べたように、性差を最大化することによってジェンダーの不均衡を解消するというエリクソンの構想が、逆説的にも女性の性役割を固定化することで、現行の家父長制という社会システムを正当化しかねないものであることは、繰り返し強調しておく必要がある。それはエリクソンのみならず、ギリガンや文化派フェミニズムを始めとする女性原理派一般に共通する理論的難点であると言える。しかし一方で、エリクソンがケアを女性固有のカテゴリーに還元できないとも述べていたことを思い返してみれば、自説がもたらす理論的、政治的帰結について十分に認識していたことは疑いない⁸⁾。

ケアを女性的資質として積極的に称揚しながらも、できるだけそれを性差に還元することなく論じるという、相矛盾するような戦略をとらざるを得なかったのは、それ自体、ケアをジェンダーという文脈において扱うことの方法論的困難さを物語っていると言えよう。

近年、隆盛を極めつつある感のケア論であるが、多くの論者は、ともすれば通過儀礼の如く、ジェンダーの問題を扱うことなしにケアを論じることがきわめて困難な状況となっている。ケアの脱ジェンダー化を志向しながらも、ケア論においてそれは許されないという二重の困難のなかにあつて、我々はどのようにしてそれを乗り越えることができるのであろうか。その方途は何よりも、女性経験に対して謙虚に耳を傾けながらも、ジェンダーという性規範が持つ政治的効力に対して常に自覚的であること、川本隆

史の言を借りれば、「本質主義」と「社会構築主義」との《間》をきわどく匍匐前進していく論法」[川本 2005:40] こそが、求められていると言えるに違いない。

【註】

- 1) エリクソンとギリガンの関係について一言すれば、ギリガンはハーバード大学でエリクソンの担当講座の助手を務めるなど、両者は一時期、師弟関係にあった [cf. Friedman (1999)]。なお、ギリガンの思想形成におけるエリクソン理論の影響については、『もうひとつの声』の第二版 (1993) における「読者への手紙」を参照のこと [Gilligan 1993: xi]。
- 2) ギリガンは、こうした男女の両課題に対する相性の違いが、結果的に「男性のジェンダー・アイデンティティは親密性によって脅かされるのに対して、女性のジェンダー・アイデンティティは分離によって脅かされる」[ibid. 8=8] 事態を生むと述べている。
- 3) E・A・ホーストによれば、こうした理解は修正論者に共通してみられる構図であると言う [Horst 1995:274f.]。
- 4) このカセルギスらによる「アイデンティティの形成は、親密性発達のための十分条件である」という見解は、アイデンティティの成熟度は高くても親密性の成熟度が低い、あるいはアイデンティティの成熟度は低くても親密性の成熟度が高いといった反証事例により導き出された結論であることを付記しておく。
- 5) 上野千鶴子は、ギリガン理論を称して「ジェンダー本質主義」と断じるが、その含意するところは、従来のフロイトやエリクソンの生物学的本質主義とは異なり、「性差が文化の産物であることに同意」したうえで、「ジェンダーの文化的な拘束力が容易に変更できないものであることを前提に、「女性文化」「女性性」の逆説的優位を説く」ものであるとさ

れる [上野 2002:14]。

- 6) エリクソンの「徳 virtue」概念の二重性を、語源学的観点から跡づけたものとしては、西平 (1985) を参照のこと。
- 7) <ケアする者/される者>の関係においては、前者による後者の搾取のみならず、後者による前者の搾取も往々にして起こりうることを指摘しておかねばならない。この搾取という問題に関して、エリクソンは「相互調節 mutual regulation」という言葉を用いて、以下のように説明している。「この相互調節に失敗すると、状況は破綻して、相互関係 reciprocityではなく、強制によって支配しようとする様々な試みに代わられてしまう」[Erikson 1959:60=2011:56]。
- 8) この点に関して、エリクソンは次のように述べていた。「この種の問題に関する理論的帰結が、深刻なイデオロギー対立に巻き込まれるような時代には、きわめて注意深くこれを行わねばならないのである」[Erikson 1997:39=2001:46]。

【参考文献】

- Archer, S. L. (1982) 'The Lower Age Boundaries of Identity Development.' *Child Development*, 53.
- (1989) 'Gender differences in identity development : issues of process, domain and timing' *Journal of Adolescence*, 12.
- Douvan, E. & Adelson, J. (1966) *The adolescent experience*. New York : Wiley.
- Enns, C. Z. (1991) 'The "New" Relationship Models of Women's Identity : A Review and Critique for Counselors' *Journal of Counseling & Development*, 69.
- Erikson, E. H. (1950) E・H・エリクソン (仁科弥生訳) 『幼児期と社会』全2巻, みすず書房, 1977-1980年。
- (1959) E・H・エリクソン (西平直ほか訳) 『アイデンティティとライフサイクル』

- 誠信書房, 2011年。
- (1964) E・H・エリクソン (鏑幹八郎訳) 『洞察と責任：精神分析の臨床と倫理』誠信書房, 1971年。
- (1968) E・H・エリクソン (岩瀬庸理訳) 『アイデンティティ：青年と危機』金沢文庫, 1973年。
- (1969) E・H・エリクソン (星野美賀子訳) 『ガンディーの真理』全2巻, みすず書房, 1973-1974年。
- (1974) E・H・エリクソン (五十嵐武士訳) 『歴史のなかのアイデンティティ：ジェフソンと現代』みすず書房, 1979年。
- (1997) E・H・エリクソン (村瀬孝雄ほか訳) 『ライフサイクル, その完結』みすず書房, 2001年。
- Franz, C. E. & White, K. M. (1985) 'Individuation and Attachment in Personality Development: Extending Erikson's Theory' *Journal of Personality*, 53.
- Friedman, L. J. (1999) L・J・フリードマン 『エリクソンの人生：アイデンティティの探求者』全2巻, 新曜社, 2003年。
- Gallatin, J. E. (1975) *Adolescence and Individuality: A Conceptual Approach to Adolescent Psychology*. New York: Harper & Row.
- Gilligan, C. (1982/1993) C・ギリガン (岩男寿美子監訳) 『もうひとつの声』川島書店, 1986年。
- Horst, E. A. (1995) 'Reexamining Gender Issues in Erikson's Stages of Identity and Intimacy' *Journal of Counseling & Development*, 73.
- Josselson, R. (1987) *Finding herself: Pathways to identity development in women*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Kacerguis, M. A. & Adams, G. R. (1980) 'Erikson Stage Resolution: The Relationship Between Identity and Intimacy' *Journal of Youth and Adolescence*, 9(2).
- 川本隆史 (2005) 「《ケアの社会倫理学》への招待」川本隆史編『ケアの社会倫理学』有斐閣。
- Nicholson, L. (1994) L・ニコルソン (萩野美穂訳) 「<ジェンダー>を解説する」『思想』853号, 岩波書店, 1995年。
- 西平直 (1985) 「E. H. エリクソンのvirtue概念：発達の視点と規範性の問題」『教育学研究』52 (2)。
- (1993) 『エリクソンの人間学』東京大学出版会。
- 品川哲彦 (2007) 『正義と境を接するもの：責任という原理とケアの倫理』ナカニシヤ出版。
- 須川公央 (2008) 「エリクソンにおける女性性とジェンダー (1)：「ケア care」概念をめぐる議論の予備的考察として」『神奈川大学心理・教育研究論集』第27号。
- 上野千鶴子 (2002) 『差異の政治学』岩波書店。